
封印聖女

檜高 梨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

封印聖女

【Nコード】

N0430Y

【作者名】

檜高 黎

【あらすじ】

青年は、現実の世界に違和感を感じていた。

居合大会に軽々と優勝する程の剣の才能を秘めているが

逸脱しすぎて、周囲からは理解される事はない彼。

耐え難い程の孤独感と、心に深い闇を宿していた。

大会からの帰路、不慮の事故に遭い、気が付けば深い森の中に倒れていた。

そこで遭遇する驚愕の事実、刃を通して共感できる相手を見つける。しかしそれは彼にとってこれから先に起こる出来事の序章でしかな

か
っ
た。
。

落雷

居合大会に出場する為、彼は京都に居た。3日に亘る競技を無事に終了し、彼の優勝で大会の幕は閉じた。

取材を適当に済ませた彼は、会場を後にする。

会場を出ると、紅葉が真赤に染上がっていた。移り行く季節の感動も、彼の眼には空虚に染まっていた。

幼い頃から感じていた違和感。彼の現実とは、虚像の様な空虚な世界だった。

ガランドウの世界。

彼は特殊な分野において、天賦の才を持っていた。他人と比較すると、剣を扱う才能は圧倒的な程、逸脱していた。

「天才か・・・」

彼は、そんな現実が堪らなく嫌で仕方なかった。

会場を出た彼は、宿泊しているホテルへと静かに歩み出した。薄暗くなった空。ビルと言う森に囲まれた街をひたすら歩く。

雑踏の中、淡々と歩く。時折すれ違う恋人達や、友人同士だろうか。目抜き通りを楽しそうに歩く人達の姿は、彼には別世界の人間に見える。

突然、薄暗くなった空から雷鳴が鳴り、雨が降り出す。先程まで楽しそうに歩いていた、彼等も急ぎ飲食店や閉店した店の軒先に避難する。

しかし、彼だけは違った。雷鳴や雨等、気にも止めず淡々とホテルへ向かう。

「雨か・・・」

独り言を呟き、ホテルまでの道をただひたすら歩く姿は、周囲には異質な者に見えただろう。

周囲の目など気に留めず、歩く彼は、やがてビルと言う大木が群生する、目抜き通りで一番大きな交差点に差し掛る。

歩行者信号は赤で彼は、歩みを止めざる得ない。

周囲には傘を差した人が数人いる程度だ。

当然、彼は滝に打たれたかのようにびしょ濡れだった。雨で学生服は水気を帯び、肌に張り付いている。少し長めの漆黒の髪からは水滴がこぼれ落ちていた。

そんな彼の姿を見てか、一人の若いOLが後ろから話し掛けて来た。

「ねえ君、傘くらい差さないと風邪を引くわ」

その優しそうな声に彼は振り返った。そして・・・

「構いません、雨に打たれたい気分なんです。そんな時も貴女にもあるでしょう？」

きつと本当に心配してくれてるのだと彼は分かっていた。だからこそ遭えて疑問で投げ返したのだ。

普通なら相手のOLも好い気はしなかっただろう。だが振り返り、言葉を発した彼を見たOLは思わず見惚れてしまったのだ。

切れ長で二重の瞳、スツと通った鼻筋、少し厚めのやらかそうな下唇をした端整な顔立ちに。

OLが見惚れて呆^{ぼう}としてる間に、信号は青に変わっていた。突然雷鳴が轟くと、OLは我に返った。

「そうね・・・そんな日もあるわね」

頬を薄いピンクに染めて、足早に横断歩道を走り去っていった。何事も無かった様に横断歩道を彼は歩きした。

横断歩道の中央部分に差し掛かった頃、信号は青から赤へ変わらだしていた。

点滅する信号と共に雷鳴が響く、まるで共鳴するかの様に。まるで、何かのスクランブルの様に。

誰かを待つて居た様に・・・雷鳴は咆哮を挙げた。

———ツガアンンンンンン！！

空から落ちた蒼き落雷は、彼の姿を閃光の彼方に一瞬にして覆い隠した。

眩い程の閃光に人々は一瞬にして、視界を奪われた。

人々が視界を取り戻す頃、雨は止んでいた。

視界を取り戻した人達は、驚きを隠せないでいた。

店の軒下から見ていた、中年のサラリーマン風の男性が声を荒げた。

「おい！人が落雷に撃たれたぞ！俺は救護に行くから、誰か救急車を呼んでくれ！」

男性が、急いで落雷が落ちた場所へ歩みを進める。アスファルトが焼け焦げる匂いと煙で、周囲はよく見えなかった。

アスファルトは熱を帯び、靴を履いている状態でも熱を感じる事ができた。

ハンカチで口の周りを当てた男性は、何とか落雷の落下した場所へとたどり着いた。

「！！！！！」

「確かに落雷が人に落ちたはずだ！何で誰も居ないんだよ！！」
男性は、その場に呆然と立ち尽くした。程なくして救急車、警察が到着し、辺りは野次馬で騒然としていた。

その場で警察により現場検証と目撃者の事情聴取も行われた。
目撃証言も多数あり、警察も手を焼いているのが現状だった。

この落雷の事故は、各種マスメディアに取り上げられ、翌日の朝TOPニュースとして流される事となった。

警察の記者会見では、少年らしき人物が、落雷に打たれた事は目撃証言からも紛れも無い事実であると言う見解であり、激しい落雷により、全てが蒸発したと報道された。

剣戟

気が付けば彼は鬱蒼とした森の中にうつ伏せに倒れこんでいた、彼は周りを見渡す、周囲には人の気配は全く無い様だった。

「此処は・・・何処だ・・・？」

何が起きたのか分からなかった。懸命に記憶を手繰り寄せる、居合大会からの帰り道、ホテル向かって歩いてたはず・・・

「そうだ。目抜き通りの交差点で、確か雨が降ってて・・・今まで感じたことのない衝撃が体に走ったのは憶えてる」

雷にでも打たれたのだろうか？あの時、雷鳴が鳴ってたから。少し指先を曲げる、指は動く様だ、次は体を起こしてみた、両の手のひらを何度かひらいては握ってみる。特に異常はない様だった。

「指先や腕に異常がなかったのは良かった・・・」

深緑の隙間から木漏れ日が漏れている、鳥の泣き声が耳に届いてきた。

「都会の喧騒とは大分違うけど、こっちの方がいい・・・」

彼は少しの間、この雰囲気を感じ締めていた。自分でも可笑しかった。事態がわからない状況の中で、心はこんなにも落ち着いていたからだ。

暫くすると、近くで馬の走る音が聞こえてきた。

ドットドットドットドットドット

「全員、止まれ！」

体躯のいい、全身鎧姿の男が叫ぶ。

次の瞬間、複数の馬に乗った兵士達に取り囲まれる、体躯のいい全身鎧姿の人物が話し掛けてきた。

「貴殿は何者か？何処から来た？見慣れない服装だが、身分を明かしてもらおうか。場合によっては捕縛する事になるが、正直に身分を明かしたほうが身のためだぞ」

何が起きてるのか理解できなかった。突然現れた甲冑姿の男達、

皆一様に手に武器を持っていて、兜を被ってるので顔は確認できない、その事がかえって、不気味だった。

「何か用ですか？」

一瞬にしてその場の雰囲気張り詰める、どうやら怒りを買ってしまったみたいだ。

「貴殿は、我らを愚弄してるのか？聞いているのはこちらだがな。それとも貴殿は、此処を何処か知らぬのか？」

どうやら体躯のいい男が、この隊の指揮官である事、これが映画の撮影なんかではない事は把握できた、怒りを買う事を承知で相手側に問いただした。

「此処は・・・何処なんですか？」

その場にいた指揮官以外の兵士は酷く激昂し、馬から降り武器に手を掛けた。

「本当に分からないんです！此処が何処か知ってるなら教えて下さい」

指揮官は言葉を放った。

「此処はな、ブリテン国の王。アーサー王の領地だ」

「アーサー王？」

「そうだ、よもや知らんわけではあるまい？ブリテンに住んでる者ならば知らぬ者はおらんぞ」

「今、俺に分かるのは、此処が元いた俺の世界ではない事だけです」

指揮官は少し思案してるようだった。

「ならば、貴殿は異界の者か？」

「恐らくそうなると思います、落雷で打たれて、気が付いたらこの場所にいたんです」

「そうか。貴殿も武器らしき物を携えてるようだが、異界の者ならば、遠慮はいらぬな」

指揮官は、2人の兵に合図を出す、すると剣を持つ騎士と槍を持つ騎士が、馬上から降りた。地に足を付けた騎士達は臨戦態勢に入

った。

「まさか・・・」

「そのまさかだ、試させて貰うぞ。」

彼は焦った、刀は手元にあるが居合袋の中入ってる。刀を取り出してる時間はない。何とかして刀を取り出す時間を稼がないと考えると、剣士が切り込んで来た。片手で剣士の手元を押さえ込み素早く足元を払いのける、剣士は倒れこみ転がる、その間に袋から素早く刀を取り出す。

指揮官は、一瞬驚き、笑った様に見えた。

「本当にやるんですか・・・」

「無論だ、生死は貴殿次第だがな」

その言葉に、彼の中に熱い物が込み上げてきたのが分かった。今まで真剣での稽古もしたが、唯の一度も高揚した事が無かったからだ。これが本当の命のやり取りだと想像しただけで、彼は興奮を抑え切れそうに無かった。

次の瞬間、体勢を立て直した先程の剣士の一人が、上段から斬り突けて来る。彼は瞬時に抜刀し、剣士の刃を右に避け、刀の物打ちで押さえ込んだ。瞬間、背中にゾクツと悪寒が走る。

後方に居た槍兵が、突きを繰り出していた、体が瞬時に反応する。槍兵の突きを鞘で軌道を受け流す。

槍の先端は的を逸れ、大地に沈む。

彼の動きを見て兵士達は呆然としていた、目の前の出来事に驚いてる様だった。

「今のは手加減しましたけど場合によっては・・・斬ります」

その言葉に指揮官の目の色が変わったように感じた。

「さすが異界の者。そんな戦い方は今まで見た事も聞いたこともない、我が精鋭をこつとも簡単にあしらうとは見事な腕だ。お前達は下がってなさい、私が直接相手をする」

指揮官は、大地に沈んだ槍を抜くと、素早く臨戦態勢に入った、そして冷めた声で言い放つ。

「その腕前、殺すには惜しいが、湖の騎士ランスロットが貰い受ける！」

彼の体に今まで感じた事の無い緊張感が疾走する、本能が危険を知らせている様だ、同時に今まで感じたことの無い高揚感が溢れてくる。

「本気で殺しに来ないと・・・貴方が死にます」

一瞬で場の空気が冷たく重く張り詰めた。互いに間合いを取って動かない、どれ程時間が経っただろうか、長くも無く、短くも無い、近くで鳥が飛び立つ音がした。

その瞬間、ランスロットが喉元を目掛けて突いてきた、瞬時に刀で槍を左へと受け流す。刀と槍から凄まじい金属音がこだまする。彼は心の中で呟く。

「なんて重い突きだ・・・受け流すのが精一杯だった」

一方ランスロットはと言うと、素早く体勢を立て直し、彼に向けては呟く。

「本気で突いたんだがな・・・まさか防がれるとは。異界から来たと言うのは、虚言でない様だ」

彼の本能は、先程より強く、この人は危険だと警告している。

本気で掛からないと死ぬのは自分だと、彼は覚悟を決めた。

「今まで本気で抜いた事ないんですけど、本気でいきます」

彼は刀を鞘に納める。

「どうした？臆したか」

「違いますよ、この技でないと貴方には敵いそうにない」

「それは、お褒めに預かり光栄だ。だが剣を鞘に収めた状態で繰り出す剣戟等聞いたこともないが？」

「そうですね、貴方の言う異界の技ですから」

彼は爽やかに笑う、そして、ランスロットも笑っていた。

互い距離を保って間合いを取る、不用意に間合いに入れば、双方どちらかが死ぬと互いに予感していた。

ゆっくりと円を描き螺旋状に間合いを縮める、互いの間合いが重

なる瞬間。

ランスロットの渾身の一撃が、彼の心臓に向かって突き出された。彼は同時に素早く抜刀し体の位置を右斜めに入れ替え八相に構え、流水の如く体を捻り、ランスロットの突きを紙一重で避け、疾走する。

「何だと！」

ランスロットは驚いた。一瞬にして己の間合いに入り込まれた事もそうだったが、真に驚くべきはその体捌き。「こいつは・・・とんでもない拾い物だ」瞬時に体を反る。

彼は、下段からランスロットの顔面を目掛け切り上げた、切先は兜を翳めて空を切る。

互いにすぐさま体勢を立て直し、間合いを取り直す。

「見た事もない剣技を捌くなんて、貴方は化け物ですか？」

「その台詞はそのまま貴殿に還そう、兜をしてなければこちらが傷を負わされていた」

二人の間に静寂が流れる、傍観していた兵士達は目の前の出来事に呆然としている様だ。

「気に入った！」

ランスロットからは先程までの殺気がまるで嘘のように無かった。

「気に入った・・・？」

ランスロットは持っていた槍を、槍兵に渡すと私の馬を連れて来るように命じた。

そして彼の目前に立ち、兜を脱いで素顔を曝け出した。

「我が主の城に着いたら、審議に問われるが、身の安全は必ず保障する」

兜を脱いだランスロットは、黒く長い髪、碧い瞳に端正な顔立ちをしていた。

彼は一瞬心を奪われた、だがその姿に違和感を感じた。口から思わず言葉が漏れる。

「綺麗だ・・・」

ランスロットは笑った。

「貴殿は、男が好きなのか？生憎私にはその気はないぞ？」

「俺にだってない！本当にそう感じたから言葉に出てしまったただけだ」

まだ笑っているランスロットを横目に、彼は酷く後悔した。

「貴殿の名を伺いたいのだが？久々に血肉が踊った相手だ、名を知らぬとあつては騎士の恥だからな」

「綾瀬 九郎・・・」

「アヤセクロウ・・・？」

ランスロットは難しい顔をしている、どうやら言いにくそうだった。

「クロウでいい、異界の言葉は発音しにくいだろうから」

「ではクロウ、我が主の城キャメロット城に誘おう」

兵士が目の前に馬を連れてきて声をかける。

「どうぞ、クロウ様」

「え？様なんてつけなくていいですよ」

「ランスロット卿が認めた方に敬意を払うのが騎士の務めです、事実、私共は貴方様の技量を見て感嘆してしまいました」

クロウは困りながらも馬に乗り、兵士に向かって言葉かけた。

「ありがとう」

兵士は膝を着き、会釈する、ランスロットはその光景を見てクロウは大物になるかも知れぬと感じていた。

「ではクロウ用意は良いか？」

「馬に乗るのは少々だけど、何時でも出発できる」

「そうか、では皆よ、私に続け！城に戻るぞ！」

出立の合図と共に馬は走り出した、クロウはこの時、これから先、己がどうなるのか想像だにしていなかった。

真偽

鬱蒼とした森を一人の騎士が馬に跨り疾走していた。いかにも騎士らしい勇猛さを兼ね備えた風貌のその騎士は、深緑で囲まれた森の中、疾走する騎士団が目に残った。

「察するに、あれはランスロットの騎士団か？しかし最後尾にいるアレはなんだ」

一見普通の騎士団の様であつたが、最後部に全身漆黒の姿をした騎士には見えない人物が見えた。

「何か好くない事が起こりそうだな、一刻も早く帰還せねば」

手綱を強く握り、馬に鞭を入れた。手綱の合図と共に馬は先程より加速し森を疾走してゆく。

一方その頃、深緑に囲まれた森をランスロット一団は疾走していた、馬の駆け走る音がこだまする。

「皆、城が見えてきたぞ！王に失礼が無きよう準備を怠るな」

クロウは困惑していた、準備を怠るなど言われても、この世界の礼儀なんて全く知らない事。王に謁見して今後の自分の行く末がどうなるのかも彼は不安で落ち着かなかつた。

「どうしたクロウ？顔色が悪いようだが？」

「ランスロット、俺はこの世界の礼儀を知らない」

そう言ったクロウに対しランスロットの言葉は、実にのんびりとしたものだつた。

「当然ではないか、クロウは異界の者だ。礼儀を知らないのは当たり前だろう、何かあれば我等がフォローに回るから心配するな」

「我が王は寛容な方だ、そう心配するな」

クロウはランスロットの言葉に安心した。

馬上で会話をしている間に、森を抜け城に到着していた。

一様に馬の速度を落とし、緩やかに城門の前で停止する、城門の

前には兵士が門を挟んで立っていた。ランスロットが兵士に命令する。

「開門せよ」

兵士は開門の合図と共に門を開く、ランスロット先頭に次々と門をくぐってゆく、その時兵士の一人が槍をクロウに向ける。

「待て！貴様は何者だ！その様な姿で、我等が城内には入れさせぬ」

すると異変に気づいたランスロットが憤慨する。只事ではないと城内の民で野次馬が出来た。

「その者は、私が認めた者だ。文句があるならば私に言うべきではないか？」

兵士は驚き慌てる、すぐ様、跪いて許しを乞う。

「ランスロット様、御無礼申し訳ございません」

その言葉にランスロットは更に、憤慨する。

「許しを乞うのは私ではなく、クロウにはないか！」

兵士は我に返り、クロウに向かい直し、跪く。

「クロウ様、ご無礼の数々をお許し下さい」

クロウは、嫌な顔一つせず、兵士に向かって話しかける。

「お立ちください、貴方はアーサー王の仕事を忠実に実行したのです。城を護るのが兵士の務め、何を恥じる事があるんです。もし私が本当に不審な輩であるなら尚の事。貴方達がこうして忠実に務めているからこそ、城の安全が保たれてるのではないですか？」

城門を護る兵士達、民衆は一樣に感嘆した。兵士は面をあげ涙を流していた。

「クロウ様の優しき、お言葉在り難く存じます、どうぞお入り下さい」

城内は騒然としている、先程の一部始終を見ていた者によって、すぐさま城内に噂が飛び交う。

「なんでもランスロット卿が認めた方らしいわよ」

「一部始終見てたを見てた奴の話じゃ騎士らしい振る舞いをして

らしやったとの話だ」

「全身漆黒で気味が悪い」

「城に災いをもたらすんじゃないかしら」

良い噂もあれば悪い噂の飛び交ってる様だった。

騎士団は城に向かい城下を馬に乗り闊歩している、周囲は民衆で溢れていた。

ランスロットは難しい顔をしていた、クロウはランスロットに近づき小声で囁く。

「何で難しい顔してるのさ？」

「クロウ、今はあまり城内を騒がせたくなかったのだ、これから審議にかけられるクロウを目立たせたくなかったのもあるが、クロウが言ったことは間違っではないなかった。少しあの兵士に言い過ぎた事もある。そう言うこともあつてな・・・」

ランスロットは反省してる様子だった。

「俺は事実をいったままだよ、それに俺は頭を下げられるような身分でもない」

「しかし、クロウが言った言葉は真に騎士らしい言葉だったぞ、これが良い方向に向いてくれると良いのだがな」

ランスロットと話をしていると城下の大広場に突き当たった、唯一、城下で一番大きな場所だった。

クロウが上を見上げると少し離れた所に城はみえていた。

「此処から見ても大きな城だな、本当に此処は元いた世界じゃないんだな」

改めて自分がどういう状況に置かれているのか、クロウは頭を痛める。大広場に視界を戻すとそこには

大きな噴水があった。噴水からは水が滾々と湧き出ていた。

クロウは噴水を横目に城へ向かう、先頭に行くランスロットが騎士団に向かって命令した。

「皆、止まれ」

クロウも慌てて馬を止める。

城への道を一人の騎士が塞いでいたようだった。

「これはガウエイン卿、何用ですか？我等は今から王に謁見しに行く所なんだがね」

ランスロットの顔は強張っていた。

「クロウ、非常にまずい事になりそうだ。よりにもよってガウエイン卿が出てきた」

「ガウエイン卿？」

「ああ、説明は後だ、どうにかガウエイン卿を説得せねば城まで辿り着けないであろう」

向かいの騎士は猛々しく咆哮をあげる。

「ランスロット卿、貴公は下がっててもらおうか、私が用があるのはその漆黒の者のほうだ、その様な輩を王に謁見させるわけにはいかんである」

「ガウエイン卿、事の経緯は審議の場で尋問するのが一番良いではないか、王や他の騎士の手前もある」

「ランスロット卿、城への道を通るのはこのガウエインを倒さねば通れないと言う事が理解できぬのか？」

ガウエイン卿が一度言い出すと梃子でも動かない事を知っている、ランスロットは顔を歪める。

「ならばガウエイン卿、貴殿の相手は私がしよう」

「くどいぞ、ランスロット卿！用があるのは貴殿ではない！その漆黒の者だ！」

互いに睨み合いが続いている、ガウエインは痺れを切らし始めていた。

「ランスロット、庇わなくていい。あのガウエインって人、道を始めから譲る気は無いようだ」

「クロウ本気で言ってるのか？ガウエインはお前を殺す気にいるんだぞ！」

「分かってるよ、ああいうタイプは言葉で説得するより、刃を以て説得するのが早い」

そう言うくとクロウは馬を降り、前に歩み出る。同時にガウエイン卿も馬を降り、こちらに歩みだす。

「クロウ!!」

ランスロットは必死に呼び止める、クロウはランスロットの言葉を聞き流す。

クロウとガウエインの距離が互いに縮まってゆき、手を伸ばせば互いに触れられる距離まで近づいていた。

只事ではない様子に周囲は、民衆で完全に野次馬が出来上がっている。

「あの漆黒の者死んだな、ガウエイン卿に敵う訳がないだろう」

「ランスロット卿が認めた方だぞ、ガウエイン卿にも劣らないだろう?」

野次馬の間では様々な意見が飛び交っているようだった。

クロウとガウエイン卿は互いに見つめ合う、そしてガウエイン卿が言葉を発した。

「漆黒の者、大した度胸だ、それだけは認めえてやろう。このガウエインの前に何の策もなく出てくるとは、余程の愚者か、大器の者が、果たしてどちらか?」

ガウエインは獰猛な笑みを浮かべている。

「ガウエイン卿、そんな事俺にはどうでもいい事だ、貴方を退けないと王に謁見できない。だから貴方と対峙してるだけだ、理由はそれだけで十分だ」

ガウエインは笑う。

「このガウエインを前にして大口を叩くか、今だ臆せずに行われる事は褒めてやろう。が貴様は前者だな、愚者は王に謁見せずに此処で死ぬことになるだろう」

「此処で死ぬかどうかは、それは貴方が決める事じゃない、俺が決める事だ」

ガウエイン卿は剣を抜いた。

「我が愛剣ガラティーンよ、愚者に神罰を下せ」

一閃、ガウエイン卿は横一文字にクロウを斬りつけていた。クロウの体はそのまま地面を滑る様に吹き飛ばされた。

「クロウ!!」

ランスロットは叫んだ。

「あつけない物だ、度胸の割には他愛も無い、どんな物かと思えばやはり唯の愚者か」

やがて土の粉塵の中に人影が映し出される、粉塵は収まり、皆一様に目を見張る。

クロウは片膝を着いて、鞘から少し刀を抜き刀身で剣を受け止めていたようだ。

「今のを防いだか、普通ならば体ごと切り裂いているんだがな」その言葉と裏腹にガウエインは、内心驚いていた。秘蔵の愛剣の技を防がれたからだ。ガウエインはクロウに問う。

「漆黒の者よ、どうやって今のを防いだ？」

「それを聞いてどうする、教えた所で貴方には使いこなせない」クロウの大口を聞きガウエインは歓喜をあげ、笑い出す。

「ふはははははは！実に見事だ！こんな所で強者に会えると、ランスロット卿が認めたのも嘘ではないか」

「今の技を防いだのはお前で二人目だ、一人はそのランスロット卿、二人目は漆黒の者お前だ」

そう言い放つとガウエインはクロウに追い討ちをかける、クロウは今だ片膝を付き微動だにしない、

ガウエインはクロウに向かい走り出す、そして真上からクロウ目掛けてガラティーンを振り下ろす。瞬間クロウは鞘から刀を引き抜き、両手を使い刀身で受け止める。

キィーーーーーーーーンと金属音がこだまする。

「くっ！」

余りの重い剣戟にクロウは、歯を食いしばる。

ガウエインの剣に一層力が増す、このまま押し切るつもりの様だ。クロウは焦った、このままでは刀が折れてしまう危険性があつたか

らだ。

しかしクロウは、溢れ出る高揚感で思わず笑わずにいらなかった、クロウの口元が緩む。

「一日に2度も化け物に会うとは思わなかった。ついてるのか、ついてないのか」

クロウは刀身で受け止めるのをやめる事にした。だがこのまま刀身を支えてる手を離せば真つ二つになるのは確実だった。

「どうした？漆黒の者。守ってるばかりでは勝てぬぞ！」

クロウはこの状況を打破にはガウエイン卿の力を利用する事にした。どうせこのままならば真つ二つだと悟っていたからだった。

「たかがこれしきの事で勝った気になってもらうと困るなガウエイン。貴様の力はこの程度か？」

その言葉にガウエイン卿は激昂する。全力で剣に力が注がれる。

刀と剣からは火花が出始めている。クロウは、内心、いつ刀身が折れるか肝を冷やしていた。

「今度はこちらから仕掛けるとしようか、ガウエイン」

「何を言うこの状況では仕掛けようもあるまいに」

「ガウエイン卿、挑発に乗ってくれて感謝する」

「何だと！」

一瞬にしてクロウは刀身を左斜めに傾ける、力の込められたガラティーンは刀の刀身を滑ってに大地に突き刺さった。その刹那、クロウは刀を引きガウエイン卿の喉元へと刀の切先を突きつける。

「貴様！最初からこうなる事を計算してたのか！」

「最初からって言うのは間違いです、ガウエイン卿、貴方は力に頼りすぎです、俺が膝を付いていたのはガウエイン卿の最初の一撃が効いて立てなかったからです」

「付け加えて言えば、ガウエイン卿が真上から打ち込んでくれた事が活路を見い出せたる要になりました。事実いつ刀身が折れるか冷や汗物でした。」

「ふん！小僧が一人前に講釈を垂れおって！」

そう言うとき、ガウエイン卿は無骨に愛剣ガラティーンを鞘へと収める。クロウも刀を引き、鞘へと静かに納刀した。

ガウエインは兜を脱ぎ素顔を晒す。

その素顔は肩にまで届きそうな、白髪交じりの茶髪を後ろで一つに束ねている、瞳は薄い青で、顔は彫りが深く、ゴツゴツとしていた。一見、無骨そうに見えるのだが決して下品ではない品格を備えていた。

「認めざる得まい、その決断力と判断力、何より死を恐れる胆力。漆黒の者、名を覚えてくれまいか」

クロウはランスロットとの事を思い出した、この世界ではクロウで通す事した。

「クロウと言います、ガウエイン卿」

「見事な腕前だ。ランスロット卿が認めたのも頷ける、私もお前を認めよう、クロウよ」

「有難うございます、ガウエイン卿」

終始を見守っていた、ランスロットを始めとする兵士、民衆はクロウとガウエインの決闘が終わったのと同時に歓喜した。

「おいおい！あのクロウとか言う漆黒の剣士、ガウエイン卿に勝利したぞ！」

「だから言っただけじゃないさ、ランスロット卿に認められた方だつて！」

「馬鹿言つなよ、クロウ様が負けるって言ったのは誰だ！」

民衆や兵士達は口を揃えて勝手に言い合いをしている。

クロウとガウエインが居る場所へ馬に跨ったランスロットが降り立つ。

「久しいな。ランスロット卿」

「ご無沙汰してます、ガウエイン卿」

「ランスロット卿、クロウは何処の出だ？この様な戦い方は初めて見る」

「今わかる事は、クロウは異界の者だと言う事、そして類稀なる

剣技、事実ガウエイン卿も体験済みでしょう。我々では判断しかねるのでアーサー王に謁見を願うつもりだったのです」

「それは無粋な事をした、だがこの年になって再び、血肉が踊るとは思っても見なかったぞ」

ガウエインとランスロットは互いに目を合わせ、視線をクロウに向ける。クロウは二人に見つめられたので恥ずかしい気持ちになった。

「ランスロット卿、ガウエイン卿、あまり見ないで下さい。恥ずかしいではないですか」

ランスロットとガウエインは目を合わせ口々に述べた。

「クロウ何を恥じる、我等に認められたのだぞ、もっと堂々としていいのだ」

ランスロットがそう言うのとガウエインが続けて言う。

「先程とは差がありすぎるな、もっと気丈に振舞え、ではないと我等も困るであろうが」

二人から小言を言われながらも、自分に父と兄がいたらこんな感じだったのだろうかと思って、クロウは内心喜んでいた。

「ランスロット卿、このガウエインも共に往こうぞ、クロウがこの様では審議が心配になりおるわ」

「ガウエイン卿、心遣い感謝します、有難く頂戴いたします」

ランスロットは騎士団に向かって号令をかける。

「ガウエイン卿と共に城に向かう、全員準備は良いか！」

兵士達は一同に素早く馬に跨り指示を待つ、ガウエイン卿も準備を終えていた。

ランスロットとガウエイン、兵士達が声を揃えてクロウに言う。

「クロウ？」「クロウ！」「クロウ様！」

ハッと我に返ったクロウは慌てて馬に跨る。

「ランスロット卿よ、クロウを見ると息子が出来たように思えるわ」

「ガウエイン卿、私は弟が出来た様に思えます」

二人の卿がニヤついてるのをクロウは無視することにした。
ガウエインは、ニヤ付きながらも、遠い目でクロウを見つめていた、まるで若き日のアーサー王を彷彿させるクロウと言う若者を。
こうしてランスロット率いる騎士団とガウエイン卿、クロウは城へ向かって走り出した。

審議（前書き）

初めて小説を書くのでお手やらかに。
この物語はフィクションです。

審議

深緑に囲まれた、小高い山の上、威厳を放ち鎮座する豪華な城がある。

ランスロット一行は城門の前にたどり着く

「さあ着いたぞ、クロウ。此処が我が主、アーサー王の居られる
キャメロット城だ」

クロウは、呆然としていた。

呆然としているクロウを見て、ガウエイン卿が話しかける。

「どうしたクロウ？しつかりせぬか！」

ガウエイン卿の言葉に我に返ったクロウは、問い返す。

「これって本物の城・・・？」

ランスロットとガウエイン卿は、怪訝な顔をする。

ランスロットはクロウが異界の出であったのを思い出した。

「なんだ？クロウ、城と言う物を見たことないのか？」

「実物を見るのは初めてだよ・・・立派過ぎて声もでない」

それを聞いたガウエイン卿は、自分の事のように喜びを声にする。

「そうだろう！クロウ、この様に立派な城は他国にはないぞ！」

「兎も角だ、此処で立ち往生していても仕方あるまい。ガウエイン卿、クロウ。場内に入るぞ」

そついうとランスロットは馬を降り、城門の兵士に願い出る。

「すまないが至急、アーサー王に、ランスロットが謁見を願いたいと言付けてもらえぬか」

「ハッ！了解しました、ランスロット様」

城門の兵士は、他の兵士に開門の合図を送ったあと、急いで王の元に走る。

「ランスロット卿が帰還なされた！開門せよ！」
ギイイイ・・・！！

音を立て木の柱でできた城門の扉が天を仰ぐ様に上っていく。

ランスロットは、今後の指揮執った。

「兵士は兵舎に戻り、各自の任につけ！騎士は王との謁見の際、クロウの証言者になってもらう」

兵士と騎士達は一同にランスロットに膝を付く。

「了解致しました、ランスロット様」

そう言うつと兵士達は、場内に入り全ての馬を厩しやうに連れていく。

「では、ガウエイン卿、クロウ参るとしよう」

ランスロットを先頭に、右にガウエイン、左にクロウ、その後ろを騎士達が城門をくぐり、王宮へと歩を進める。王宮へと続く道は赤いカーペットが引かれ、中庭には美しい木々は大地に根を下ろしていた。

ランスロット一行が、宮殿へ向かい歩を進めていると、すれ違つ、侍女、騎士、兵士達は片膝を付き、皆一様に頭を下げる。その光景を見て、クロウは驚いていた。

「ランスロットとガウエイン卿って・・・こんなに凄いだ」

その言葉にランスロットとガウエインは互いに見合う。

「その騎士と五分に渡りあったのだ、臆せず自身を持てクロウ」

「負け惜しみではないがなクロウ、ワシは本気は出しておらんぞ」
二人の励ましに、クロウは穏やかで暖かい気持ちになった、今まで自分を理解しようとしてくれる人が周囲に居なかった為だった。

そう心の中で想いながらも、負けじとガウエイン卿に言い返す。

「ガウエイン卿、俺も本気を出してない」

ランスロットを挟み、お互い睨み合う、その様子を見てランスロットは困った顔をしている。

「やれやれ、まるで本当の親子の様だ。ガウエイン卿、御子息が増えて良かったですね」

ランスロットは苦笑していた、ガウエイン卿は不機嫌そうだった。一行は、中庭を抜け、吹き抜けになった広い廊下を早足に抜けて行く。

やがて、王宮の扉に突き当たる、そこには扉を守る騎士が二人、

扉を挟み両側に立っている。

騎士がこちらに気づき、ランスロット一行に、膝を付き頭を下げる。

「ランスロット様、アーサー王より承っております。どうぞお入り下さい」

扉が開かれた。

床は一面、豪華な赤い絨毯が敷かれ、王宮を支える柱が6本、その柱の本数分、騎士が柱に沿って立って居た、他より一段高くなっているその場所に、王と王妃が玉座に鎮座していた。

ランスロット一行は玉座の手前まで進み、片膝を付き礼をする、ランスロット、ガウエイン卿は共に、一歩前に出て、王と王妃に挨拶をする。

「アーサー王、グイネヴィア王妃、只今帰還致しました」

アーサー王は二人に向かい、話しかける。

「大儀であった、ランスロット」

「ガウエイン、久しいな、元気になっておったか！」

アーサー王は立ち上がりガウエイン卿の肩を両手でバンバンと叩く。

「この通り、無事元気で暮らして居りますぞ！、アーサー王」

「そうか、それは良かった、病にでも遭ってたならと心配しておったのだ」

「もう御主も若くないのだからな」

アーサー王はそう気さくに笑った。

その顔立ちは、少しだけ彫が深く、瞳は薄い緑色をしていた、赤い外套を羽織り、銀色の鎧を纏っている、金色の髪は肩に届きそうな位だ。頭の上には王冠を乗せている。

クロウの目には、アーサー王が、王様って感じには見えなかった。威厳があるのだが、親しみ深い感じがしたからだった、クロウの思う王様のイメージとは少し掛け離れていた。

突然、アーサー王は思い出したかのように声をあげる。

「おお！そうだったな、ランスロット。昨夜、落雷が落ちた場所に付いて聞こうと思ったのだ」

「その事でアーサー王に相談があったのです、落雷の落ちた場所に向かった所、私の後ろにあります、青年が倒れていたのです」

「そうか、しかし風変わりだな。髪の色から瞳の色、身に着ける物まで。漆黒とは変わっておるな」

「アーサー王、風変わりなのは、姿だけではありません。異界の剣技を使います」

そう述べたランスロットを、アーサー王は見つめる。

「ランスロットを疑う訳ではないが、俄かに信じがたい。」

一人の騎士が、片膝を付き顔を伏せ、アーサー王に向かい願いでる。

「失礼ながら申しあげます、アーサー王。ランスロット卿が述べた事は、真の事でございます」

アーサー王はどうしても信じれなかった、そこにガウエイン卿が申し出る。

「アーサー王、ランスロット卿とその騎士が言う事は真の事ですぞ。不覚にもこのガウエイン後れを取られました、年には勝てませんな」

ガウエイン卿はそう述べたあと豪快に笑った。

アーサー王はクロウに近づいていく。目の前までやって来て、観察する様に見つめる。

「真に不思議な髪と瞳と顔をしておる。よく見れば、女性の様な顔をしておる」

「私はこのキャメロット城の君主、アーサー・ペンドラゴンだ。貴殿の名はを伺いたい」

クロウは緊張しながらも言葉を絞り出す。

「アーサー王、お初に御目にかかります、名はクロウと申します」

「クロウか、真に名も漆黒だな、しかし、未だに信じられん。どう見ても背丈といい、骨格といい、女性とそうは変わらぬぞ」

「クロウ。ランスロット達を打ち破ったのは真か？」

「はい。アーサー王」

アーサー王は、窓辺に立ち、考え込んでいる様だった。暫くして、クロウには信じられない言葉告げられた。

「国と民を思えばこそ、クロウには地下牢に入ってもらふ。名も姿も漆黒、剣に至っては、円卓の騎士と同格。城内をうろつかせる訳にはいかぬであろう、城内の混乱も避けねばならん」

「ランスロット、ガウェイン。貴公らには申し訳ないが、クロウは当分間、地下牢にいてもう事とする」

ランスロットとガウェインは即座にアーサー王に申しでる。

「アーサー王、お考え直し下さい、このような仕打ちは余りではないですか！」

「どうか、私の顔に免じて地下牢だけは勘弁していただけぬか」

アーサー王は窓辺から離れ、玉座に座り言葉を述べた。

「ランスロット、ガウェイン、如何なる肩入れも許さん、王たる者、一番に国と民衆の事を考えねばならぬ、私も本音を言えばその様な事はしたくない。国を想えばこそだ、分かってくれぬか？」

ランスロットとガウェインは苦虫を噛んだ表情をしている。互いに刃を交えた強者が地下牢行きに成るのが納得できないでいる様だ。クロウは愕然としていた、ランスロットやガウェイン卿の助力も虚しく、地下牢行きになったのが信じられなかった。

アーサー王は立ち上がり、騎士に命じる。

「クロウを地下牢に連れて往け」

ランスロットとガウェインは声を上げ、立ち上がる。

「クロウ！！」

二人の卿の声も虚しく、クロウは地下牢に入れられる事になった。

地下牢（前書き）

ご意見、ご感想お聞かせください。
厳しい指摘、大歓迎です。

地下牢

クロウは深緑に囲まれた、小高い丘に鎮座するキャメロット城の地下牢へと、幽閉される事となった。王命により、クロウは騎士達に連れられ、王宮から出される。

王宮から出て、吹き抜けになった広大な廊下の角には、地下へと降りる階段があった。

騎士達に連れられ、石段を下りて行くと、周囲を石で囲まれた、牢屋への出入り口が鉄格子になっている牢屋が無数にあった。

牢屋への入り口には、鉄格子で柵が設けられていた。

鉄格子の前には、二人の牢兵が槍を携え立っている。騎士達がクロウを連れて降りてきた事に気づき、素早く姿勢を正す。

「ご苦勞様です、今鍵を開けますので、少しお待ちください」
鍵を回す金属音が鳴り、鉄格子の扉が開かれる。一人の牢兵の案内により、騎士達は一番奥の牢屋に連れて行かれる。

クロウは無数にある牢に、囚人が居ないことに気が付き、騎士に問い正した。

「この牢には俺以外の、囚人はいないのかい？」

クロウの質問に、一人が騎士が答える。

「此処は、身分の高い者が罪を犯し幽閉される場所です」

「そうか」

騎士と会話をしていると牢屋の最深部に着き当たる。

牢兵が鉄格子の鍵を開ける。

クロウは黙って牢に入る。すると王宮でアーサー王に申しでた騎士が話しかけてきた。

「クロウ様、申し訳ありません。何の力添えもできず・・・」

騎士は、長めの黒髪を後へ流し、中性的な顔立ちをしていた。深みのある碧眼から涙が零れ落ちている。

クロウは、騎士に優しく語りかける。

「泣かないでください。最悪の結果を考えてなかった訳ではないですから平気です。それに、当分の間と言ってましたし、アーサー王は俺を身分の高い者として配慮し、扱ってくれてますから」

クロウは牢に入れられた事よりもこの騎士が泣いてる事が気になった。

「正直に言うと、貴方が俺の為に泣いてくれるのが不思議でなりません」

騎士はその問いに答える。

「クロウ様、私も貴方と刃を交えた一人だからです。兜で顔を覆っていたので、覚えていないのも無理ありませんが、出会った時、最初に貴方に斬りつけたのは私なのです」

その言葉にクロウは思い出す、

「あの時の・・・剣士の方ですか」

「はい。ランスロット様と戦うクロウ様の姿を拝見させて頂きましたが、クロウ様の剣技は逸脱しています。故に他の者には、理解しがたい物でしょう」

「一瞬ではありましたが、この身で刃を受け、私なりに感じました。才あるが故、常に孤独、深い孤独を彷徨う刃で御座いました」

「僭越ながら申しあげる所。クロウ様は、何故我等を斬らなかったのです？」

「人を斬るのは、覚悟が必要です。強いからと言って無闇に人を斬りたくは無かった」

「ですが、あの時私は、殺す気でクロウ様に剣を向けました。敵同士であるなら当然の事ではないですか？」

「相手が、本当に敵であるかどうかは、刃を交えただけではわからないでしょう。意見が食い違ったとしても、全てが自分と相容れないとは限らないですから」

「クロウ様は、お優しいすぎます。このままだといつか命を落とす事となります」

「心配してくれてありがとう。好かったら、貴方の名前を教えてくださいませんか？」

「私はパーシヴァルと申します。以後お見知りおきを」
そう述べるパーシヴァルは牢兵に申しつける。

「毛布を持ってきてくれないか。夜間は寒くなる、クロウ様に何かあつては、心配するランスロット様とガウェイン様に申し訳が立たない」

牢兵は急いで牢屋に置いてある毛布を持って来た。毛布をパーシヴァルに受け渡す。

「夜間は、冷えるのでお使い下さい。何かあれば牢兵に言って、私を呼んで下されば、出来る限りの事をしますので」

クロウは毛布を受け取り、壁にもたれ掛かった。

「ありがとう・・・パーシヴァル・・・それと二人に俺は大丈夫だと伝えて・・・くれ」

パーシヴァルにそう言うところクロウは、そのまま深い眠りに落ちていった。

そんなクロウを見て、パーシヴァルは余程、疲れていたのだろうと察した。牢へ入りクロウの手から毛布を取り掛ける。

「今日一日、見知らぬ土地で、この様な扱いを受けられては疲れて当然だろう」

牢から出て牢兵に鍵を掛けさせると鉄格子の入り口を通り抜ける。そして、二人の牢兵に言い放つ。

「クロウ様は、ランスロット様とガウェイン様に認められた方だ。何か遭つたら只ではおかぬ」

パーシヴァルは二人に言い含めると、騎士達と共に石段を登っていった。

一方、王命であれ、納得できない。二人の卿は憤りを隠せないでいた。

「アーサー王の言う事も、我等も分かる。だが幽閉する事もなか

ろう！」

「ランスロット、アーサー王はどうしたのだ？ 昨夜の落雷にしても、高が落雷。貴公の騎士団を出してまで詮索することもなからう？」

二人の卿は、府に落ちないでいた。

「クロウはどうしてるかの・・・」

ガウエイン卿が心配するのも、無理はないとランスロットも思っていた。

「夜になると、牢屋は一段と冷えるからな。風邪でも引かなければよいが」

二人が心配していると、扉越しから声が聞こえた。

「ランスロット様、パーシヴァルです。クロウ様から伝言を託っております」

「入室を許可する、入れ！」

「失礼致します」

パーシヴァルは二人の卿の前に歩み出て、片膝を付く。

ランスロットは心配した顔で、パーシヴァルに聞いたです。

「クロウの様子はどうか？」

「気丈な方です。牢に送られたと言うのに、お二人に大丈夫だと伝えておいてくれと、託っております」

「そうか・・・」

ガウエインは困った顔をして言う。

「気丈か、頼りないんだか頼りになるのか分からん奴だな。クロウがそう言うなら我等は待つしかあるまい」

「そうだな、暫くは様子見だな。パーシヴァル、クロウの監視を怠るな！」

「ハッ！」

返事をし、パーシヴァルはランスロットの部屋を後にする。

「ガウエイン、我等も寝るか」

その言葉にガウエインも同意する。

「今日は、色々あり過ぎて疲れたわい。特に地下牢にいるクロウのお陰でな」

「確かに、年寄りには荷が重かるう？」

「まだ現役で入られるわ！今日は体調が悪かったのだ」

ランスロットは冗談交じりにガウエインを弄んでいる。冗談に付き合うガウエインにも、クロウを通して、いつの間にかランスロットとの絆が生まれ始めていた。

「では、ランスロット。ワシは寝るぞ」

「ああ、また明日な、ガウエイン」

ガウエインは、部屋から出て自室に戻って入った。

ランスロットも、ベットへと体を投げ出す。

「今日は、クロウのお陰で本当に疲れた・・・」

独り言を呟きながらランスロットも、睡魔に誘われ眠りに入ってしまった。

少女

深夜を向かえ地下牢は、先程までとは違う顔を見せる。
余りの寒さにクロウは、目が覚めた。

「地下牢行きを宣告されてから、こうなるのは予想してたけど、
想像以上に冷え込むな・・・」

寒さで目が冴えてしまつてクロウは寝付けないでいた。
毛布に包まる様に、横になる。

寒さに震えるクロウの目の前に、光の粒が落ちてくる。
体勢をぐるつと真逆に入れ替えて廊下に目を向ける。

どうやら、地下牢の突き当たりにある、大きな鉄格子の窓から入
つて来てる様だった。

蛍の光に似た、光の粒は鉄格子の窓を通り抜け、空中を浮遊して
いる。

「綺麗だなあ・・・それにしても尋常じゃない数だな・・・」

光の粒は、クロウの居る、牢屋の鉄格子をすり抜け、ゆつくりと
人の形を形成していく。

クロウは、目の前で何が起きてるのか理解できかった。

光の粒はやがて、人の姿に変わって行く。

一瞬、眩い光を放つ。クロウは眩しさの余り瞬間的に瞳を閉じた。
そしてゆつくりと開く。

そこには自分と同じ位の年の純白のドレスを纏った、可愛らしい
女の子が立っていた。

床まで根を下ろしそうな、真直ぐに伸びる金髪の髪。綺麗に整つ
た眉、高くも低くも無い、鼻筋の通った小さな鼻、唇は厚めで瑞々
しかった。

クロウが特に気になったのは、赤と碧の左右非対称の瞳だった。
少女は、こちらを見つめる。

「こんばんわ。クロウ」

「君は、誰？何で俺の名前を知ってるの？もしかして幽霊？」
彼女はクスクスと笑った。

「違うわ。クロウには秘密よ。それに質問の数が多すぎるわ」
クロウは、恥ずかしくなって頬を染める。まるで子供だ。

「じゃあ一つだけ。君の名前を教えてください？」

彼女は、困った顔して恥ずかしそうに答える

「じゃあ、特別。クロウにだけ名前を教えてあげる」

「私の名前は、ヴェルフィーユ」

「こんばんわ、ヴェルフィーユ」

挨拶を交わして、互いに少しの間、沈黙が流れる。

ヴェルフィーユはクロウの目の前に座り、突然、息が掛かりそうな位、顔を近づける。

「クロウの瞳は、漆黒なのね。でも透き通っていて、とても綺麗」
ヴェルフィーユが、突然近づけて来たので、クロウは驚き頬を真赤に染める、なんとか離れようとする。しかし後ろは完全に壁だった。

「ヴェルフィーユ、少し離れて・・・顔が近い」

「どうして？」

「どうしてって・・・ヴェルフィーユが凄く可愛いから」

ヴェルフィーユは頬を染め、恥ずかしそうに言う。

「クロウ、もしかして、私を口説いてるの？」

クロウは絶句し、高速で首を左右に振る。

「む。何でそんなに、強く否定するのよ！これでも私凄くもてるんだからね、引く手数多で、困るくらいなんだから！」

ヴェルフィーユは怒ってる様だった。

「ヴェルフィーユ、君は可愛いし、綺麗だとも思う」

ヴェルフィーユは機嫌を直し、恥ずかしそうに頬を染めてる。

「だけど俺には、人を好きになるとか、そう言う感情がわからないんだ」

「どういうことなの？」

ヴェルフィーユは不思議そうに見つめてくる。

「言葉そのままだよ。感情が無いに等しいとでも言ったほうが早いかも知れない」

「俺には何も無い、あるのは刀だけだから」

クロウの瞳に影がさすのをヴェルフィーユは見逃さなかった。

ヴェルフィーユはさらに距離を詰める。

クロウは逃げ出そうとした。後ろは壁で身動きが取れないの思を出す。

「しまった！」

二人の距離は先程より、更に縮まっていた。互いの唇が触れそうなほどに。

互いに見つめ合う。

「クロウ怖い？」

「怖い物なんてない」

「嘘。本当は、怖いんでしょ？」

「何が？」

「人と触れ合うのが、怖い癖に強がってる様に見えるわ」

その言葉にクロウは感情を露にする。

「怖くないって言ってるだろ！」

「クロウ、貴方はこのままでは闇に沈む事になるの。それだけは絶対させないわ」

「貴方は、私の運命の人。だからこうして貴方の前に現れたの」

「だからお願い。動かないで静かにして」

ヴェルフィーユは、クロウの額に自分の額を押し当てた。そして目を閉じる。

ヴェルフィーユの口から聞き取れない言語が紡ぎだされる。

「TUBD SO*DHKDDJ KL*JGDDSFHKL*J
ILLK***」

言葉を紡ぎ終えた途端、クロウは意識を失った。

粉雪

ヴェルフィーユは宙に浮かび、俯瞰するように湖に降り立つ、水面から浮いた状態でヴェルフィーユは周囲を見渡した。

「此処がクロウの精神世界なの？」

湖を除いてそこは、白色で統一された、見渡す限り何もない世界。「何もないなんて異常だわ。普通の人なら何かしら世界を構築して広がってるのに・・・」

ヴェルフーユは湖を見下ろす。

「一度、入ってしまったからには、クロウを見つけるまで帰れないわ」

気合を入れるように両手で自分の頬を叩く。

「きつと、この湖の中にクロウはいる。助けなきゃ」

ヴェルフィーユは、目を閉じ、そして、静かに湖へと足をつけた。体はゆっくりと水面へと沈んでゆく。

足先から頭まで、水に浸かった感覚に覆われる。そしてヴェルフィーユはゆっくりと目を開けた。

ヴェルフィーユは、驚き思わず声にする。

「綺麗。こんなにも水の中が透き通ってるなんて、でも・・・生き物がいないなんて不自然だわ」

「兎に角、潜ってみないと分からないわ、つべこべ言わずやるの。ヴェルフィーユ」

そう言い聞かせるとヴェルフィーユは、体を反転させ水面を蹴る。勢いよく水中を潜ってゆく。その姿は、まるで人魚の样だった。もう、随分と潜っただろうか。一向に、水中の風景は変わらなかった。

「本当に、クロウがこの湖の中にいるかわかんなくなって来るわね」

水中で立ち往生していると、少し先に、何かが見えた。

ヴェルフィーユは、勢いよく加速すると、やっとの思いでその場所へたどり着く。

内部はドーム状になっていて、空気の膜が張っている様だった。ゆつくりと膜を抜け内部へと降り立つ。

目の前には大きな鉄製の扉が見えた。ヴェルフィーユは近づき、力一杯押してみたが、びくともしなかった。

「もう！クロウの馬鹿！こんな重い扉、どうやってあければいいの！私だって、他人の精神世界に入るの初めてなんだから！」

ヴェルフィーユは、瞳に涙を浮かべ怒りだした。

突然。涙を浮かべ怒るヴェルフィーユの頭上に、粉雪が降り注ぐ。粉雪は旋風を巻き、雪の塊へと変化していく。雪の塊はやがて女性性の姿に変わる。

見たことも無い服を着た女性は、優しい顔でヴェルフィーユに語りかける。

「こんにちわ。ヴェルフィーユちゃん」

ヴェルフィーユは涙を拭った。

「貴女は誰？」

女性は困った顔をしながら優しく答える。

「私はこの子の大切な人の残留思念。貴女が困ってるみたいだから助けに来たの」

「クロウの大切な人？」

「そうね、でも、それは私じゃないんだけど、私でもあるわ」

「そう。クロウの心の中に深く眠る大切な想いなね」

女性は優しく微笑んだ。

「ヴェルフィーユちゃん、この子を助けてあげられる？私も長い歳月を懸けて助けようと試みたの。でも、私ではを助けてあげられないの」

ヴェルフィーユは強く頷いた。

「この先は、酷く過酷な物を見ることがなると思うわ。その覚悟

はある？」

「精神世界に入ると決めたときから覚悟はできてるわ。クロウを助けないと私も出れないもの」

「それに・・・どんな事でもいいからクロウの事もっと知りたいから・・・」

頬を赤く染めながら初々しく話す。ヴェルフィーユを見て女性は優しく微笑した後、少し残念そうに微笑んだ。

女性は、ヴェルフィーユの手をとり、扉の前まで歩き出す。

そして、小さな鍵を取り出し鍵を捻る。

「ガチャン！」と音を立てて、扉が開く音がした。

女性は扉を少し開けてヴェルフィーユの頭を優しく撫で、扉の向こう側へと送り出す。

「ヴェルフィーユちゃん。これからは貴女が、クロウの傍に居てあげてね」

「貴女・・・もしかしてクロウの・・・」

女性は優しく微笑むと、粉雪の様に舞って跡形もなく散っていった。

ヴェルフィーユは漆黒の闇のに落ちながら呟く。

「さよなら。クロウのお母さん」

幸福（前書き）

書き込んだ物語が吹っ飛びました・・・
涙でそうです。

幸福

ヴェルフィーユは目をゆつくりと開ける。木で囲まれた天井が視界に入る。

見たことの無い草が敷き詰められた部屋に寝ていた。

「・・・此処は・・・何処？・・・」

ゆつくりと体を起こすと、突然、男の子が飛びついてきた。

「えっ！」

男の子は、ヴェルフィーユの体に抱きつき嬉しそうに笑う。

「よかった。おねーちゃん目が覚めたんだね！」

そう言くと脱兎の如く階段を下りて行く。

「おかーさん！おねーちゃんが目覚ましたよー！」

「そう良かったわね」

「おかーさんもおねーちゃんに会ってよ、凄く綺麗なおねーちゃんなんだよ」

「わかったわ。おかーさんも行くから慌てないの」

ヴェルフィーユは狼狽ろうたひした。

「このままじゃ見つかつちゃう！」

何処か隠れるところはないか部屋を見渡すと、紙で作られた扉を見つける。起き上がり扉を開けようとする。

「なんで開かないの・・・どうして？」

迷ってる時間はない、ヴェルフィーユは魔法で扉を通り抜ける。

「もう！なんて狭いの！でも此処ならきつと、見つからないわ！」

階段を上がって来る音が聞こえるに連れ、ヴェルフィーユの鼓動は早くなる。

「おねーちゃん！・・・あれ？いない」

「九郎の自慢のおねーちゃんは何処かな？」

優しく九郎の肩を抱き、微笑む顔の見覚えがあった。

ヴェルフィーユは驚きを隠せなかった。

「あの男の子がクロウなの？それにクロウのお母さん！」

クロウは、何かに気づき押し入れへと駆け出す。押し入れの隙間からヴェルフィーユの髪が零れ落ちていた。

「おねーちゃんみつけた！」と同時に襖ふすまが開く。

ヴェルフィーユは心の中で呟く。

「クロウの馬鹿あー！」

クロウの手によって押し入れは開かれた。

「ほらおかーさん。おねーちゃん居るよ！」

ヴェルフィーユは涙を滲ませていた。

「九郎。お母さんには、見えないわ」

「どうして？」

「そうね。九郎は心が綺麗だから妖精さんが見えるのかもね。大人になると善い事も、悪い事も知ってしまうから、お母さんには見えないのかも知れないわね」

そう言うクロウに優しく微笑み、頭を撫でる。

クロウは不思議そうな顔で、聞いている。

「九郎には、ちょっと難しすぎたみたいね。すぐ夕飯だからお風呂に入りなさい」

「うん！」

そう言うクロウのお母さんは階段を降りていった。

ヴェルフィーユは安堵した。そうよね普通見えるわけ無いもの。

見えるクロウのほうがどうかしてるわ。

ヴェルフィーユが押し入れから這出ると、クロウが勢い良く抱きついてくる。

「きゃー！」

クロウが抱きついた衝撃で尻餅をつく。

「おねーちゃんは妖精さんなの？」

ヴェルフィーユの胸に顔を埋め、クロウは上目使いでこちらを見上げてくる。

一瞬、凄く可愛いと思ったヴェルフィーユは抱きしめそうになる衝動を必死に堪える。

「そうよ、おねーちゃんは妖精さんなの。でもクロウにはどうして私が見えるの？」

「妖精のおねーちゃん。どうして僕だけ見えておかーさんには見えないの？」

質問を、質問で返されたヴェルフィーユは決めた。逃げようと。

「クロウ、おねーちゃんもそろそろ夕飯だから、妖精の国に帰らないといけないの。助けてくれてありがとう」

「えー！帰っちゃうの？」

「ほら。クロウもお風呂に入らないと、ね？」

「うん！」

そう言うつとヴェルフィーユは魔法を詠唱する。

「H L D U ; P U N K * * D S E U ' W R K P *」

光の粒に姿を変え、空気に溶けていった。

後に残されたクロウは、階段を下りて行った。

「おかーさん、妖精のおねーちゃん帰っちゃった」

「残念、お母さんも見たかったわ。九郎は今からどうするのかな？」

「お風呂に入るー！」

「偉いわね、早く入ってきなさい。ご飯出来るわよ」

ヴェルフィーユは、下から聞こえてくる親子の会話を聞きながら、疑問に思っていた。

「不可視の魔法をかけないと誤魔化せないなんて、クロウの目は一体どういう目をしているの・・・」

「それに、無邪気なクロウを見ると、この後何が起こったのかも気になるわ。このまま様子を見るしかないわね」

ヴェルフィーユは、壁に背をつけ座り、暫しの休憩を取ることにした。

喪失

外は霧が、立ち籠めていた。霧の中から黒いローブを纏った、男とも女とも判らない人物が現れる。

工事現場の電柱に拠りかかり寝ている、会社員風の男性に近づくと額に人差し指を着け、聞き取れない言葉を発する。

会社員風の男は一瞬、目を見開いた。

ローブを纏った人物は、満足そうに微笑むと、再び霧の中に姿を消した。

謎の人物が霧と共に去って行った後、会社員風の男は、静かに起き上がった。

そして咆哮した。

男は、手元に転がっている鉄パイプを持つと、視点が定まらない、空ろな瞳をして、覚束無い足取りで静かに歩き出した。

ヴェルフィーユは、異様な気配を察知して目を覚ます。

「何？今何か、酷く嫌な感じがしたわ、もしかして・・・クロウ達に何あったんじゃない・・・」

目覚めたヴェルフィーユは、浮遊する様に急いで、階段を降りて行く。

階段を降りて行くと玄関が見えた。

玄関を背に廊下を浮遊するように疾走する。

「クロウ、何処にいるの！」

焦る気持ちを抑え、クロウ達を探していると、右の部屋から声が聞こえる。

ヴェルフィーユは、扉を通り抜ける。

「今晚から、明日にかけて雨が降る模様です。外出の際には傘を忘れないように気をつけて、お出かけ下さい。では、次のニュース

です」

ヴェルフィーユは、四角い箱の中に映る、小人を見て問いただす。

「ねえ、貴方、クロウ達を見なかった!」

焦る表情で、四角い箱に収められた、小人に話掛ける。

「質問に答えなさい!」

プツ――――!

四角い箱は真っ黒になり、小人は消えて行った。

「ちよつと、逃げるなんて卑怯よ!」

ヴェルフィーユが憤慨していると、背後から声が聞こえた。

「もう、九郎ったら、テレビを消しなさいってあれ程言つたのに、困つた子ね。で、TVを消し忘れた犯人は何処にいるのかな?」

ヴェルフィーユは呆気に囚われている。

「え・・・テレビ? 小人じゃないの?・・・」

ヴェルフィーユは恥ずかしさの余り、穴があつたら入りたくなつた。

「さつささ最初から解かつてたわ!」

独り言を言うと、クロウの母親に目を向ける。

クロウのは母親は、したり顔でコタツのをめくる。

「犯人は、ここね!・・・あら?」

テレビを消し忘れた犯人は、コタツの中で眠っていた。

「もう! あれ程コタツの中で、寝ないように言つたのに。本当困つた子ね」

クロウの母親は、怒りながらも優しく微笑む。

「二人とも無事だったのね。良かった!」

安堵の表情を浮かべ、ヴェルフィーユは心を落ち着かせた。

クロウ母親は、壁掛け時計に見上げる。

「もう夜の11時なのね」

そう言うとクロウの母親は、クロウを抱き抱え、階段を上がり2階に上がっていく。ヴェルフィーユも一緒についていく。

クロウの母親は、クロウを畳に寝かせると、押入れから布団を出し引き始める。

「あの人が、居なくなつて7年も経つのね・・・大きくなったわね。私の大切な可愛い宝物」

クロウの母親は、愛おしそうに寝ているクロウ見つめている。

突然、下からガラスの割れる音が聞こえてくる。

クロウの母親とヴェルフィーユは、慌てて階段を降り様子を見に行と、そこには、玄関を破壊し、片手に鉄パイプを携えた、空ろな目をした男が立っていた。

「クロス、クロス、クロスクロスクロス！」

呪文の様に唱えながら玄関から二階へとゆつくりと、歩みを進める。

クロウの母親は急いで、階段を駆け上がる。

大きな物音に、目を覚ましたクロウは母親の元へと駆け寄る。

「おかーさん・・・」

クロウを抱き寄せ、覚悟を決めたかの様に、静かに言葉を紡ぐ。

「九郎はいい子だから、お母さんの言う事、何があっても守れるわよね？」

「おかーさん。どうしたの？何かあったの？」

「九郎、いい子だから聞いて！絶対に押入れから出たら駄目よ！いいわね？」

「うん・・・」

クロウを抱え、押入れへ、急いでクロウを押し込む。

ゆつくりと男は階段を上がって来て、目の前に姿を現す。

「何か家に御用かしら？こんな深夜にセールスなら間にあつてるわ！」

クロウの母親は気丈に立ち向かう。

男は、奇声をあげ咆哮する。

「どうやら、話の通じる相手じゃないみたいね・・・」

ヴェルフィーユは、どうにか助けようと、魔法を詠唱する。

「AKLH*SONG*+JZIBSO*+WUNC*+
ASPR***」

男に向かい魔法を放つ。男を通り抜け魔法は消えていく。

「クロウの過去に起きた事は、どうして変えられないの!? どうして! クロウには干渉できるのに!」

ヴェルフィーユは困惑し、絶望した。唯、黙って見ているしか出来ない自分に。

男は奇声をあげ、鉄パイプを大きく振り上げ、クロウの母親に襲い掛かる。

「こんな事したくないけど、少し痛い目見てもらわよ!」

そう言い放つと、クロウの母親は男に向かい突っ込んでいく。

男が鉄パイプを振り下ろす、僅かな隙を突いて、一瞬で間合いを詰めると、男の顎を掌低で真上に打ち抜く。

異質な音と共に、男の顎は砕け、歯が飛び散る。

男は仰け反り、ゆっくりと、クロウの母親へと向き直す。振り下ろした鉄パイプを持ち直すと、片手でクロウの母親の首を掴み取り、軽々持ち上げ、力一杯投げつける。

一瞬にしてクロウの母親は壁に叩き付けられる。

「どうして・・・動けるの? 完全に決まってたわよ・・・」

大きな音に押入れに居た、クロウは驚き襖を少し開け、覗き見る。次の瞬間。クロウの目に畳に転がり悶え苦しむ、母親が飛び込んでくる。

クロウは母親を助けようと、襖から飛び出そうとした。

それに気づいたクロウの母親は、悶え苦しみながら、クロウを凝視する。

? 絶対に出てきては駄目よ! 九郎?

瞳はそう告げていた。

ヴェルフィーユは、母親の態度に気付き、急いで襖をすり抜けると、クロウを抱き寄せ、眼を覆い隠す。

「クロウ、見ては駄目!!」

男はゆつくりとクロウの母親に近づくと、力一杯、鉄パイプを叩き付けた。

クロウには何が起こったのか、分かっていた。

無惨にも男の手から、幾度も鉄パイプが振り下ろされる。

血が飛び散る音、骨が砕ける音を聞きながら、幼いクロウに分かることは、母親が、悲鳴一つ漏らす事なく死んだと言う事だった。

それは母親の自分への精一杯の思いやりだったのも分かっていた。クロウの母親が息絶えたのと同時に、男も糸が切れた人形の様に、その場に倒れ込んだ。

ヴェルフィーユは、クロウを襖から向き直し見ると、そこには以前のクロウは居なかった。

「して・・・やる・・・ころ・・・して・・・やる・・・いつか絶対に僕の手で・・・殺してやる・・・」

空ろな瞳でヴェルフィーユを見上げる、その瞳にはもう何も映ってなかった。

ヴェルフィーユは、クロウを抱きしめ涙を流しながら謝る。

「ごめん・・・なさい・・・何もしてあげられなくてごめんなさい・・・！」

そう告げた後、ヴェルフィーユは、記憶の狭間へと飲み込まれて行った。

十年の歲月？

惨劇の事件から10年と言う歲月が流れていた。幼い無力な男の子は、青年へと成長していた。

青年は、あの痛ましい出来事を、一度として忘れてはいなかった。寧ろ、あの出来事を糧に生きてきたと言っても過言ではないだろう。事件の後、青年は母方の祖父に預けられて育った。

当初、誰とも話さない少年を、祖父は厳しく育て上げた。ある時は真冬に外へ放り出し、井戸から汲んで来た冷水を浴びせたり、竹刀で叩いたりしてどうにか言う事を聞かせた。

抜け殻の様な少年を、見かねた祖父は自分の流派である居合を少年に教え込む事にした。

少年は、居合を習い始めてからと言うもの、一度として稽古を休む事は無かったのだ。自ら進んで稽古に明け暮れては、毎日深夜まで木刀を振り続けた。次日が休みならば、学校から帰宅すると、すぐに着替をすませ、明け方まで一心不乱に木刀を振り続けた。例え雨の日や、台風の日で遭ろうとも絶対に休むと言う事はしなかったのだ。

常軌を逸した稽古の末、元来、青年が持っていた天賦の才を開花させる事になった。才能が開花すると青年は、祖父に実践での訓練を頼み込んだ。真剣での実践は危険だと判断した祖父は、条件を出す事にした。

居合大会に出る事を条件に、真剣での実践を許可したのだ。青年は二つ返事で承諾すると、居合大会へと進んで参加した。気が付けば、その道で青年を知らない人はいない位になっていた。

青年に取って大会で優勝する事は意味のない物となっていた。居合大会への参加、それは、復讐を成し遂げる為の通るべき道でしかなかったからだ。

一つの目的を達成するため、青年は己の全てを刀に捧げた。

どんな時も、青年の心は、平穩を取り戻す事はなかった。青年の心には、常にあの晩の出来事が渦巻いていたからだった。

「母さん・・・必ず、母さんを殺した奴をこの手で裁いて見せるから・・・」

青年はそう呟くと、祖父の家を出て学校に向かい歩き出す。いつもの見慣れた通学路。

周囲は、生徒の掛け声で賑やかに賑わっている、そんな事を気にも止めずに淡々と学校へ向かう。

学校と言う場所に関して言えば、青年は全く興味が無かった。ただ祖父が行けと言うので仕方なく行っていただけだった。青年からすれば、寧ろ、学校に使う時間を実践練習に使いたかったのだ。

それだけ青年にとって、学校なんてどうでもよかったのだ。

学校の門を潜り、下駄箱へ向かう。

下駄箱を開けるとそこには、いつもの様に何通かの手紙が入っていた。

「毎度の事とは言え、いい加減にして欲しいな・・・色恋沙汰には興味が無いんだ」

青年はそう呟くと、手紙を持って教室へと向かう。

教室に入ると、真っ先にする事は、ゴミ箱の前に向かう事だった。そんな青年を見てか、皆好い印象はなかった。青年は学校で孤立していた。

誰とも話す事もなく、誰からも理解されない。青年にとってそれは当たり前的事だったのだ。

いつしか生徒の間に噂が流れた。「面倒なことに巻き込まれたくないなら、綾瀬には近づくな」

生徒達の間ではすでに暗黙の了解になっていた。

午後の授業が終わり、青年は屋上に呼び出された。

屋上に行くとは毎度の様に、不良達が青年を囲みこむ。

「おい！綾瀬、テメエ調子に乗ってんじゃねーよ！俺の妹の手紙捨てたんだってなあ！」

「手紙？ああ。下駄箱に入ってた手紙か、読まずに捨てたけど何か問題でもあるの？いつもの事だろ？」

「テメエ・・・俺の妹の気持ちを考えた事あんのか？今日こそは勘弁しねえ！」

「妹の気持ち？幹久の後ろにいる妹の事？用があるなら直接言ってくればいいじゃないか？」

幹久の妹の姿は不良達に紛れて確認できなかった。

「それができないのが女つてもんだろが！お前は人の気持ちがわからねえのか？あ？」

「興味ないね。もういい？用がないなら帰るけど、あるなら早くしてくれないか？」

不良達は、完全に頭に来ていた様子だった。

「綾瀬、今回ばかりは頭に來たぜ！ぶっ殺してやる！」

そう言つと幹久は、ポケットからナイフを取り出し青年に突きつける。

「俺を殺すのか？君が？無理だよ、人を殺すのには覚悟がいる」

「うるせえー！」

ナイフを持つて襲い掛かる、幹久の腕を掴み、力一杯握り込む。

「いつつてええ！放せ！コラ！」

「だから言つたろう？君じゃ俺を殺せないって、どうして解らないんだよ」

「人の命を奪うつて事がどれだけ、重いことが解つてる？簡単に出来る事じゃないんだよ！」

そういつと青年は踵を返し、教室へ向かうと方向を変える。

幹久達は、背後から一斉に襲い掛かる。

次の瞬間、彼等は地面に倒れていた。

倒れこんだ幹久達は呻き声を上げて苦しんでいた。

「挑発したのはいいけど、呆気なさ過ぎて訓練にもならないな・
・」

そついうと青年は階段を降りて行こうとした。急に後ろから呼び止められる。

「綾瀬先輩！あのつ・・・そのですね・・・実は前から先輩の事が好きだったんです！私と付き合ってもらえませんか！」

声の主は可愛い女の子だった。

「ごめんね。君の気持ちには答える事ができないんだ、こんな俺の事好きになつてくれてありがたいんだけど・・・」

「先輩、どうしてですか？他に好きな人がいるからですか？いるなら教えてください。私・・・先輩の事知りたいです」

青年はゆつくりと女の子に近づくと耳元で囁く。

「俺の母親。十年前、殺人鬼に殺されたんだよ。俺は母親が殺される所を目の前で見ちゃったんだ。それからずっと母さんを殺した奴を探してる。だから・・・無理なんだよ。もう辞める事はできないから」

話を聞いた女の子はショックで声が出ない様子だった。

「酷い事言つてごめん。幹久が言つた事は良く解つてる。本当、妹思いのお兄さんだね。こんな真直ぐな奴そういないよ。起きたら刃物は止めとけて伝えてくれるかい？俺の様になつたら戻れなくなるからさ」

そつ女の子に託けると青年は階段を降りていった。残された女の子は、唯泣く事しか出来なかった。青年振られた事ではなく、冷たい態度ではあるけれど、他人を気遣う優しい心の持ち主。過剰なまで自分を責めて生きる青年を思うと涙が止まらなかったのだ。

十年の歳月？

青年は学校の正門を出て足早に家路に着こうとしていた。何かを思い出したかのようにピタリと足を止める。ああ。そう言えば今日は新調してた武道着が出来上がってる日だったなあと呟いて踵を返す。

歩いてきた道を逆に辿りながら駅の方へ向かう。

駅へ向かう途中、屋上であつた幹久の妹とすれ違った。彼女は青年を見るなり、今にも泣き出しそうな瞳をし顔を伏せて駆けていった。

「随分と嫌われた物だなあ。近寄らなくなっていていいか・・・」

そして、何も見なかった様な顔をして駅へと歩みを進める。

駅に着くと学生やサラリーマン、OL等で混雑していた。青年は人込みを避けるように駅を通り抜け、ビルとビルの隙間の路地に足を踏み入れる。

新幹線が、頭上を通過する高架下は街の不良達の溜まり場となっていた。

知らずに足を踏み入れたのだろうか？

若い女性は、不良達に追いかけているようだった。

女性は息を切らしながら、こちらに向かつて駆け寄ってくる。

「助けて・・・お願いだから助けて！」

その顔からは、血の気が引き、蒼白く氷ついていた。

不良達は、女性に追いつくとまるで壊れた玩具のようにケタケタと笑う・・・

「残念でした！お姉さんは俺達と今から楽しいことする事が決定しちゃった！」

女性は、不良達に捕まり、路地裏へとその姿を消してゆく。

リーダー格の男が近づいてきて、青年を上から下まで舐める様に

観察した後、寧猛に嗤う。

「お前も、見たからには同罪だな。ふーん、結構な美少年君だな。あっちの人に人気が出そうだ」

まるで子供が新しい玩具を、買ってもらったようにはしゃぐ、その姿は一般人ならば、戦慄を覚えただろうか。

だが青年にはこいつらの、異常さはまがい物にしか見えなかった。青年が黙って見てるとリーダー格の男は、舌打ちをし数人仲間を呼びつけた。

「普通、ビビッて土下座やら有り金出して、跪いて許しを乞うもんだけどなあ。お前の眼はよお。俺と同類の眼してやがるのに、自分分は特別みたいな眼しやがって、気にいらねえんだよ！」

あつと言う間に青年は、四人に囲まれていた。

「少し、お仕置が必要だな！なあそう思うだろ、お前等もさあ？」

リーダー格の男の問いかけに、仲間も嬉しそうにケタケタと嗤う。一瞬、寒気がした。仲間の一人が、青年の背後からナイフで斬りつけてきた。

青年は軽く受け流すと相手の腕を掴み、力一杯捻り投げる。

投げられた仲間は手首を押さえ、転がり泣き叫ぶ。

「腕がああああ！俺の手首折れてるう！！」

もがき苦しむ仲間を見てか、数人の顔が硬直する。

「覚悟も無く刃物を持つ奴は、簡単にメッキが剥がれるな。そういう物を持つて事は、自分の命も天秤に賭けるって事だと解ってる？」

「こいつ・・・イカレテやがる・・・」

リーダー格の男を除いて、囲んでいた不良達は、畏怖の眼で青年を見つめ逃げ出した。

「チッ！腰貫け共が！お前の言う通り、半端な奴に人殺しは無理だろうな。でも俺を連中と一緒にしてもらつと困るなあ。生憎、俺はもう経験済みだ！！」

リーダー格の男は、自慢そうに嗤うと臨戦態勢に入った。
そのスタイルを見て青年は言い切る。

「ボクサー崩れか・・・」

「ご明察！それから俺は、気が付けば、此処にいたってわけ！」
「事故で誤って人を殺したお前と一緒にするな。お前は逃げ出しただけだろう」

「知った風な口をほざくな！お前、もういいから死ね！」

リーダー格の男は、間合いを計る。

次の瞬間、男の左手からジャブが繰りだされる。

青年は手の甲でジャブを捌くと、男は、薄い笑みを浮かべ、即座に青年の顔面へ目掛け、親指を突き出した右ストレートを放った。
が、男の放った右ストレートは空を切る。

「！！！」

男が右ストレートを放った瞬間、体ごと男の間合いに入り込み、体を沈めると下から軽く体重を乗せ掌低で顎を打ち抜いた。

男が気が付いた時にはもう遅かった。体は宙に浮き、糸が切れた様にその場に沈み込む。男が沈み込んだ場所には鮮血で、小さな水溜りが出来上がっていく。

「ご丁寧にサミング付きか。気が付いたら前後の記憶は無いだろうけど、暫く寝てろ」

女性が消えた、路地裏へ急いで走り出す。細い丁字型の路地裏を右に曲がると、やがて、突き当たりにぶつかった。

そこは死角になっていて人目につかない場所だった。

その隅に、数人の男達に囲まれ女性は居た。

見れば、服を破かれ何箇所か、肌が露出していた。男達は女性に馬乗りになり四肢を押さえつけていた。

すでに女性はに空ろな瞳で、空を見上げている。

その光景を眼の辺りににした青年は、今まで必死に押さえつけていた自分の中に潜む、黒い殺意に飲み込まれた。

理性と言う枷を忘れた殺意は、青年を闇へと引きずり込んだ。

馬乗りになった男へと、疾走すると背後から頭部に向けて中段蹴りを食らわす。

蹴られた男は吹き飛ばされ、ベシヤツ……と音を立て壁へ張り付くように崩れ落ちる。

最早、青年には相手の生死など関係なかった。

異変に気づいた男達は、次々とナイフや金属バットを持ち出し、青年に襲い掛かる。

男の一人が青年の胸部に向かってナイフを突き刺す。青年は素早く腰を少し下ろすと、左手で腕を掴み、捻ね上げると、右手で男の顎を真横に打ち抜く。

ナイフの男は吹き飛ばされるように転がり込むと微動だにしなくなった。

背後にいた男は、即座に金属バットを青年の頭へ打ち下ろす。

青年は一瞬で、右足を軸に左足を下げると、体を位置を素早く反転させる。金属バットは硬いアスファルトに叩きつけられた。

キ……ンと金属音が空気を伝い響き渡る。

青年は瞬時に跳びあがると、相手の側頭部を目掛け、右足を振り下ろすと異質な鈍い音がした。

男はそのまま、眼から鮮血を流し崩れ落ちた。

青年を中心とした境界線の外側は、血の海と化していた……やがて女性の瞳に、光が戻る。

周囲を見渡すと、先程まで自分を押さえつけていた男達が、鮮血に染まり倒れていた。

青年は、静かに女性に歩み寄ろうとした。カチカチと歯を震わせ、女性を拒絶する。

「来ないで……!!」

鮮血の水溜りの中、青年は足を止める。

ピシヤリツ……!!

青年は初めて気が付いた。自分の足元が血の湖になっている事に。女性が、恐怖するのもおかしくはなかった。

そこに居たのは先程までの青年ではなく、どこか殺人鬼の雰囲気
を漂よわせる……何かがいた。

女性の表情を視て。

正気を取り戻した青年は、静かに女性に近づくと上着を脱ぎ、露
出した肌に学生服を纏わせた。

女性は、恐怖で凍り付いていた……

「同類か……」

一言呟くと、青年はその場を後にした。

十年の歳月？

その日の夕方、幹久は電話越しに妹に小言を言われていた。

「お兄ちゃん、本当に解ってるの？綾瀬先輩の事、悪く思わないでよ！」

「先輩は、お兄ちゃんの事を思ってたってくれたんだからね！それに私、お兄ちゃんに綾瀬先輩に暴力振るってなんて頼んでないんだから！解ってる？」

「ああ、解ってるって！こっちも忙しいだよ！もう切るからな？」電話を切ると、幹久は無造作に携帯を上着のポケットにしまい込む。

口を開けば綾瀬、綾瀬と幹久は腹が立っていた。

「くそ！綾瀬の野郎！妹に心配掛けさすなよ！」

駅前を歩きながら、いつもの様に路地裏を奥に入っていくと、女性が生が壁の隅に持たれかかり震えていた。

幹久は何が起きたか理解できなかった。顔なじみの奴等が、血塗れで倒れていたからだった。

「おい！しっかりしろ！生きてつか？」

その声に倒れていた奴等は何とか返事を返す。

「その声は・・・幹久か・・・俺等生きてる？」

「ああ・・・まあ骨は逝っちまってるかもな・・・それより何があつたんだよ！」

「・・・お前と同じ高校の・・・制服着た奴が、俺らをこっぴう風にしたんだよ・・・」

「なんでだよ！」

「俺等がそのねーちゃんと楽しもうとしてたらこうなった・・・アイツは完全に逝っちまってる！」

「馬鹿か？お前等何してんだよ！俺でも怒るぞ！ちょっと待って。救急車すぐ呼ぶからよ！」

幹久は電話を取り出し急いで119番に電話掛ける。

「こちら119番、事件ですか？事故ですか？」

「ああ、事故。急いで宮寺駅の新幹線通ってる高架下まで来てもられないっすか」

「了解、至急救急車を向かわせます」

幹久は、電話を切ると、女性が羽織ってる学生服に目がいく、女性に近づき話しかける。

「ねーちゃん、少し聞きたいんだけど、この上着着てた奴。どんな奴だった？」

女性は、幹久に対して脅えてるようだった。女性の気持ちを察して幹久は言葉を掛ける。

「安心しろよ、こいつらみたいにあんたをどうにかしようなんて全然ねーからよ」

その言葉に安心したのか、女性は幹久に事情を話し始めた。

「へえ。そう言う事が、まあこいつ等が一番わりーわな、でもねーちゃんも悪いんだぜ。この辺りはな、地元の奴なら絶対近寄らない場所なんだからよ」

「しかし、このまま行くと面倒な事になっちまうわなあ・・・どうすっかな？」

「ねーちゃん此処で見たことは全部忘れちまいなよ。面倒事に巻き込まれるの嫌だろう？」

そういうと女性は、黙って頷く。

「じゃあよ、今すぐ此処から離れる。と言ってもその格好じゃな・・・」

幹久は再び電話を取り出し、急いで知り合いに電話を掛ける。

「ああ、俺っス。事情説明してる暇ないんで、女物の服すぐ持つて来てもらえます?」

程なくして一人の女性が鞆を携えやってきた。

「幹久。あんたに頼まれた服持つて来たけど、こりやどうなってるんだい?」

「すいません、真菜さん。実は、こいつ等がその女性に暴行してたらしんですけど、返り討ちに遭っちまったみたいで。面倒な事になる前に女性だけ逃がそうと思ってね」

女性は呆れたような顔をして、倒れてる連中を、一瞥する。

「当然の報いだね。寧ろこいつ等やった相手がどんな奴かは興味あるわ」

そう言つと真菜と言つ女性は、幹久に鞆を投げて渡し、帰ろうとする。

「真菜さん、今度こいつ等返り討ちにした奴、紹介しますよ。真菜さん気に入ると思いますよ?」

そう言つと真菜は振り返り、嬉しそうな笑みを浮かべる。

「本当に!美少年?」

幹久は、顔を引きつらせる。

「ええ・・・まあ。ムカツク奴っすけど・・・その代わりと言っちゃなんすけど、この女性と一緒に目抜き通りまで出てもらえます?これから救急車来るんで」

真菜は二つ返事で承知すると幹久に向こう向いてなと眼で合図する。暫くすると女性は着替えが終わったようだった。

「おし!幹久!後頼んだよ。私はこの子を目抜き通りまで送るからさ。例の約束忘れんなよ!ああ!それと表でうちの組の馬鹿が倒れてたから下っ端に命令して、車で組まで運ばせといたから安心しな」

そう言つと真菜は喜び勇み、女性を連れ大通りに出て行った。

「真菜さんこの状況で嬉しそうだな。どつという神経してんだよ・・・」

「おい！お前等まだ生きてつか？」

「・・・おう・・・幹久・・・」

「なんだよ。気絶してたのか情けねーな！まあいいや、救急車来るまで暫く寝てろよ。あとよ、何聞かれても同士討ちって答えとけよ！真菜さん命令だかな！」

「おう・・・」

幹久は女性が置いていった学生服に眼をやる。学生服の裏には『綾瀬』と書いてあった。

「戻れなくなる・・・そう言うことが。あの馬鹿野郎！妹が泣いたらどうすんだよ！」

幹久がぼやいていると、表からサイレンの音が聞こえる。

「もう着やがったか。まあいい頃合いだな」

幹久は自分の着ている制服の下に、綾瀬の制服を着込み、上から自分の制服を着て覆い隠した。

「こいつ、本当に小っせいなあ。加えてあの顔じゃ妹じゃなくても惚れるわな」

救急車が到着すると、次々と怪我人が担架で運ばれていく。そのうち警察も来て、幹久は忙しくなった。

十年の歲月？

雑踏の中、覚束無い足取りで街を当てもなく徘徊する青年は、駅の方角に向かう救急車を見かけた。鼓動が早くなる。

隠れるように、路地裏へと歩みを進めるとフェンスにもたれ掛かり、崩れ落ちる。

「俺は・・・彼等に・・・何をした・・・？」

青年は混乱していた。

青年がはつきり覚えている事は、女性が殺された母親と重なって見えた事だった。

あの光景を目の当りにした青年は、殺意に自我が飲み込まれて行った感触を思い出す。

恐ろしくなつて、歯がカチカチ、カチカチ、と鳴る。

いつまた正気を失うか解らない自分が、怖くて仕方なかった。

青年は、あの路地裏の事も、理解していた。自分の中に内在する、抑えきれない衝動を、抑え込む為に、敢えて危険な場所を足を踏み入れていたのだ。少しでも渴きを潤す為に・・・

「感情を殺せ！・・・じゃないと潰れるのはお前だ！！」

そう自分に言い聞かせるとフェンスからゆっくりと起き上がる。

そしてまた覚束無い足取りで、暗闇に点々と螢火を灯す街へと向かい歩き出した。

まるで、何かを求めるように街を彷徨う。青年の瞳にはすでに光がなく、死人の様な眼をしていた。

通りを行き交う群集の中、青年は大型家電スーパーの前で歩みを止める。

陳列されたテレビからは、夕方のニュースが流れていた。

雑踏の中、足を止めた青年は、ニュースが終わるまでテレビを呆

と眺めていた。

「もう、戻れないか・・・いや元から戻る場所なんて俺にはなかったんだ・・・あの時からずっと」

感情の無い貌をし、静かに歩き出す。

もう何処へ向かうのか自分でも解らなかった・・・

それから青年は何処をどうあるいたのか覚えていない。

気が付けば、漆黒の闇に包まれた閑静な住宅街を歩いていた。

そして、意識を失い倒れた・・・

次に意識を取り戻したとき、ダンボールで出来た簡素なベットに寝ていた。

周辺を見渡すと、河川敷だった。外は雨が容赦なく打ち付けていた。

濡れない所をみると、どうやら高架下したの様だった。

「目が覚めたかい？」

薄汚い男が話しかけてきた。風貌から察するにホームレスだった。

「あなたが、俺を助けてくれたんですか？」

「ああ、驚いたよ。道路の真ん中で倒れてたからね・・・」

そう言つと男は焚き火に、拾ってきた小枝に投げ入れる。

「何か事情があるんだろうが、帰れる所があるのなら早く帰ったほうがいい・・・」

その言葉に、青年は言葉が出ない。

「・・・・・・・・」

薄汚れた男は、小枝を投げ入れると静かに語りだした。

「こんな話がある、昔一人の男が、酒に酔って殺人を犯した話だ・・・酒に酔った男は、若い女性を鉄パイプで殺害した。それから刑務所に送られた。刑務所を出所した男が、その後知った事は、自分

の家族が世間やマスコミ、親類縁者から蔑まれた後、自殺した事だった……」

「男は、当然の報いだと思った。人の命を奪ってしまったのだから……だが家族を巻き込んでしまった事、被害者の家族にも決して忘れる事のできない傷を負わせてしまった事を考えると男は死ねなかった」

「その後、男は女性に男の子がいた事を知った……その後、男はその男の子を捜した……」

青年は、感情を押し殺し問いたです。

「その男は何処にいる……」

「君の目の前にいる」

青年は押し殺した感情を解き放つと薄汚れた男に飛び掛った。

「お前が母さんを殺したああ！！お前さえ居なければ……！！

！」

倒れこんだ男の襟を掴み、顔面を殴打する。そこには一匹の獣がいた。

幾度も、幾度も、叩きつける……

「殺してやるっ！！！！」

薄汚れた男は、夥しい（おびただしい）血を流し、意識が無かった。

青年が止めを刺そうと渾身の一撃を放つ刹那……

顔面に衝撃を受けて青年は転がっていく。

「何とか間にあったかの……この馬鹿者が！！」

番傘を差して歩いてきた人物は、薄汚れた男を抱え上げ怪我の具合を見る。

「まあ何箇所か骨折れてるが命には問題はなからうて。最後に一撃を貰ってたら死んでたじゃろうがな……」

静かに体を起こすと、青年は咆哮する。

「九郎、いい加減にせんか！事件の事はもう終わった事じゃ、早

く忘れい!!」

「邪魔するな!! ！そいつは俺が殺すって決めたんだ! 邪魔するな
ら爺さんでも許さねえ!」

そう言つと青年は祖父に殴りかかる。

祖父は、青年の拳を右手で円を描く様に払い上げる、体を崩され
た青年の顎を左手で真横に打ち抜くと瞬時に左手を引き、腰を下ろ
し、右手で顎を真上に打ち抜いた、そして浮き上がった側頭部に回
し蹴りを叩き込んだ。

「やれやれ・・・怒りで戦い方すら忘れなんだわ」

青年はグシャリと音を立て地面転がり、這いつくばる。

「爺いさん・・・そいつは・・・俺が殺す・・・んだ・・・」

「九郎・・・もういいんじゃない・・・起つな・・・」

「嫌だ・・・そいつは俺が・・・!」

「九郎! 今のお前の姿を見て雪子はと思うかわからんか!」
「・・・」

「悲しいのはお前だけじゃない! 俺も一度として忘れた事はない
! そして九郎、お前が殺そうとした男もまた苦しいじゃ・・・心
優しいお前が一番よくわかつとろう!!」

「爺さんは・・・そいつを・・・許せるのか?・・・俺は・・・そ
いつを殺したい・・・」

青年は、這いながら体を起こすとゆっくりと構える。

「小さな時から根性だけは、一流じゃな。全く面倒な事じゃて」
祖父はそう言つと、青年に襲い掛かった。

青年は、祖父の左拳を右手で払つと瞬時に五指を腕に掛ける、そ
のまま腕を捻り上げる、祖父はその場で一回転して捌くと左手を素
早く引き抜く。

「九郎。俺の腕を折る気じゃったの。そんなにこの男が憎いか?」
「当たり前だ! その為なら・・・」

「儂がお前に武道を教えたのはな、精神を養ってほしかったからじゃ。人を殺す様に教えたつもりは毛頭ないんじゃないか」

「・・・・・・・・」

「お前の中には闇が潜んでおるの、暫くそいつと向き合ってみるとええじゃろうて」

そういつと祖父は踵を返し歩きだす。羽織から電話を取り出すと救急車を呼んだ様だった。

「爺さん・・・まだ話は終わって・・・ない！」

青年は疾走すると背を向けた、祖父に向かって中段蹴りを放った。祖父は右手で足を掴み取り脇に抱え込む、遠心力を乗せた左手で青年の顔に裏拳を放った。瞬時に抱え込んだ足を離す。

青年は顔面を殴られた勢いで転がり込んだ。

倒れた青年に祖父は語りかける。

「九郎、毎年、事件の日に雪子の墓前に花を添えてくれてるのはその男じゃよ。お盆もそうじゃ、墓前で涙を流しながらずっと謝る姿を、儂はこの目でみてきたんじゃない、それに比べてお前はどうか？墓前にも顔を出さず、復讐の為に、毎日明け方まで稽古しては飯も食わずに寝るだけじゃろう」

「俺は、母さんの為に！」

祖父は呆れた顔をして言い放つ。

「九郎は勘違いしとるの？雪子がいつそんな事頼んだ？」

「・・・・・・・・」

「兎に角、一旦この男の話を聞いて見る事じゃな、そこから見えて来る物もあるうて」

祖父はそう告げると、到着した救急車に男の付き添いとして乗り込む。

残された青年は、母親が亡くなって以来、その晩初めて泣き叫んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0430y/>

封印聖女

2011年11月21日14時08分発行